



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

## 「インド芸能の世界 with 人間国宝」⑤

飛んだ。飛行機が飛んだ。

3週間前デリーからルンビニー（ブッダ生誕の聖地）に行ったとき、飛行機は途中までしか飛ばなかった。翌日は大公演会が控えている。もし、飛行機が飛ばなければ大プロブレムになる。今回の一番の心配事であった。

安心事もある。羽田空港に現れなかった女性が深夜便で追いかけてくる。一旦ホテルに入り再びコルカタ空港へ出迎えに行った。早朝からの移動で疲れ気味だったが、背筋の美しい彼女を目にしたとき疲れも和らいた。

翌朝総領事が打ち合わせのためホテルにやって来た。なるほどボス教授が言うように顔貌に人徳が現れている。

(すべてがうまくいくぞ！)

最初に訪れたのは、フーグリー河上流のベルル僧院である。ベナレスで観光客が目にする世俗的なヒンドゥー教ではなく、ハイレベルな僧団である。境内にゴミの類はなく、神聖な雰囲気満ちている。

天心がヴィヴェーカーナンダと会見した部屋がある。二人がどのような会話をしたのか知らないが、彼は“仏教の源流”を見たに違いない。本来的な「出家僧団」と「大乘仏教」的な形態である。しかし、両者はどうもしっくりいかなかったようである。

天心が東京美術学校長を辞めざるを得なかったのは、上司の妻との恋愛関係である。(1898年)その後茨城五浦で隠棲状態にあった。天心は世間から忘れられたかのようにであったが、彼を再評価したのがわが恩師哲学者Sであった。昭和19年(1944)に『岡倉天心』を新潮社から発刊している。敗戦に向かう前年に上梓されたのは何か意味があったのかもしれない。

奔放な美術史家と厳格な出家者とでは馴染めない。しかし、タゴールとは芸術を通じて気が合った。

公演はラビンドラ岡倉バワンで行われた。ラビンドラはタゴールの名前で、バワンは会館の意味になる。

観客は満杯に近かった。テレビ新聞の取材も殺到し大成功であった。

質疑応答のとき、江戸初期から代々伝わる小鼓について聴衆の一人が質問した。

「本当にそれは 400 年前の楽器ですか？」

あきらかに疑いの口調である。実はわが輩も信じられなかった。なぜなら、それはどう見ても新品のようであったからである。火事になったら、何をおいても鼓を持って逃げろ、というのが家訓だそうだ。

(泥棒さんが一杯いるインドによく持ってきたものだね)

次の公演先は、タゴールが設立した大学である。コルカタから汽車で 2 時間 30 分ほどの内陸部にある。駅に着くと学生たちが出迎えてくれた。

わが輩が最初に大学を訪れたのは 1997 年のことである。その頃は田園風景が広がっていた。この大学の名物風景は、大樹のもとで行われる授業である。わが輩はいたく感激したことを覚えている。今や現代的な大学に様変わりしていたが、まだ樹下での授業を行っていた。

大講堂での公演には教授や学生たちが集まり熱い視線が送られた。

暑いといえば、大学構内を巡るのに暑かったことを思い出す。かつては校内を巡るのにリキシャ(輪タク)を使ったものだが、事故がありオート・リキシャ禁止になっていた。学生たちが案内してくれたが、広大な校内を歩くのはきつかった。

そろそろ終盤近くなったとき、ある事実が判明した。明日の汽車の予約が午後 1 時 10 分発の便になっていた。教授の要請で午後 5 時 30 分に変更した、つもりであった。いや、ちゃんと変更した。

(困った。これは困った)

なぜなら、午後に副学長との会食の予定が入っていたからである。すったもんだの末に夕刻 6 時 40 分の座席をなんとか確保できた。

これはわが輩の失態である。変更したのは確かだが、後に届いた回答は午後 1 時の便確保の知らせであった。それに気が付かなかった。

読者諸氏よ。わが輩も慌てたよ。会食を準備した教授の顔をつぶすことになるからである。

会食は豪華な迎賓館で行われた。副学長や学部長それに教授が席についたが、全員女性であった。ちなみに副学長は実質的に「学長」である。それなら学長は誰か。モディ首相である。首相が卒業式に臨席するとき、この迎賓館に泊まる。

(汽車の切符がとれて良かったよ)

帰路の車中は冷房車でなく地元の人たちと相席になった。それはそれで面白い体験だが、ムンムンで暑かった。皆さんに苦勞を掛けてしまったが、一人だけ大喜びした女性がいた。「世界一冷え性だ！」と豪語する某大学の先生である。

わが輩は、胡坐をかき、鞆を盗まれないように膝の上に抱いたまま爆睡していた。まるで迷想の苦行者だよ。読者諸氏よ。

(疲れた！)

いよいよ最終章だ。最後の最後で失敗した話をしようではないか。